

- 式会社, 2004.
- ・ 栢植あづみ「生命科学の技術開発を促すものは？」『毎日新聞』夕刊, 2005.2.14,
 - ・ 中辻憲夫『ヒトES細胞 なぜ万能か』岩波科学ライブラリー 88, 岩波書店, 2002.
 - ・ Kate Schuler, "Opportunity fading for agreement on Frist's plan for stem cell bills." *CQ Weekly*, Jul. 25, 2005, p. 2046.
 - ・ 「東大大学院医学系研究科生命・医療倫理人材養成ユニット <<http://square.umin.ac.jp/CBEL/>>
 - ・ Wired News: 最先端医療, <http://hotwired.google.com/news/gro_news/medtech/>
 - ・ Wired News: med-tech center, <<http://www.wired.com/news/medtech/>>
- (いび みえこ・海外立法情報課)

【短信：アメリカ】

連邦最高裁判所判事の人事をめぐって

——ロバーツ判事の指名までの動き——

宮田 智之

2005年7月1日、サンドラ・オコナー (Sandra Day O' Connor) 連邦最高裁判所判事が引退を表明した。病身の夫とより多くの時間を過ごしたいとの気持ちが引退を決めた最大の理由であったと^(注1)言われている。

オコナー判事の引退を受け、およそ11年ぶりに連邦最高裁判所の人事が行われることになり、ブッシュ (George W. Bush) 大統領は、7月19日に同判事の後任候補として、現在、50歳で保守派との評価があるジョン・ロバーツ (John G. Roberts Jr.) コロンビア特別区巡回区連邦控訴裁判所判事を指名した。

一方今夏は、オコナー判事と並んでウィリアム・レーンキスト (William Rehnquist) 首席判事の去就も注目されていた。甲状腺ガンを患い健康面での不安を抱えていたことから、レーンキスト首席判事は近々引退するであろうと見られていた。そのようななか、レーンキスト首席判事は自ら当面引退の意思のないことを明らかにし、引退についての周囲の憶測を打ち消した

のであったが、正にその矢先である9月3日に突然死去した。

この事態の急転を受け、ブッシュ大統領はオコナー判事の後任としてのロバーツ判事の指名を急遽取り下げ、新しい連邦最高裁首席判事の候補としてロバーツ判事を指名し直した。

その後、連邦上院は9月29日にロバーツ判事に関する人事を承認し、同判事の第17代連邦最高裁首席判事への任命が成立するが、本稿では主に7月からの2か月間を対象に、オコナー判事の引退、ロバーツ判事の評価、そして同判事の指名をめぐっての上院民主党及びキリスト教保守派の反応を紹介する。これら上院民主党およびキリスト教保守派の動向は、今後の人事においても誰が指名されようと焦点となるものである。その意味で、今回、ロバーツ判事の指名について、この両者がどのような反応を示したかを点検することとしたい。

なお、9月以降の動きを簡単に述べると、ロバーツ判事承認後、10月3日にブッシュ大統領

はオコナー判事の後任にハリエット・マイヤーズ(Harriet E. Miers)現大統領法律顧問を指名、その後の同法律顧問の指名辞退を受けて、10月31日にブッシュ大統領はサミュエル・アリート(Samuel A. Alito Jr.)第3巡回区連邦控訴裁判事を指名するが、こうした9月以降の一連の動きについては次号で詳しく紹介する予定である。

I 「オコナー・コート」

1981年に女性初の連邦最高裁判事となったオコナー判事は、近年、アンソニー・ケネディ(Anthony M. Kennedy)判事とともに連邦最高裁の判決の帰趨を決する存在として知られてきた。なかでも、国論を二分する訴訟において、オコナー、ケネディ両判事がいかなる立場を取るかによって連邦最高裁の判決が大きく左右されるケースがしばしばあった。そのため、近年の連邦最高裁を「レーンキスト・コート」ではなく、「オコナー・コート」と指摘する声さえ少なからずあったのである。

連邦最高裁は、9名から構成されており、1994年以降は次の判事から構成されてきた。

- ・ウィリアム・レーンキスト首席判事：71年にニクソン(Richard Nixon)大統領が指名、86年にレーガン(Ronald Reagan)大統領が首席判事に指名
- ・ジョン・スティーブンス(John Paul Stevens)判事：75年にフォード大統領(Gerald Ford)が指名
- ・サンドラ・オコナー判事：81年にレーガン大統領が指名
- ・アントニン・スカリア(Antonin Scalia)判事：86年にレーガン大統領が指名
- ・アンソニー・ケネディ判事：87年にレーガン大統領が指名
- ・デビット・スーター(David H. Souter)判事：

90年にブッシュ(George H. W. Bush)大統領が指名

- ・クラレンス・トーマス(Clarence Thomas)判事：91年にブッシュ大統領が指名
- ・ルース・ギンズバーグ(Ruth Bader Ginsburg)判事：93年にクリントン(Bill Clinton)大統領が指名
- ・スティーブン・ブライアー(Stephen G. Breyer)判事：94年にクリントン大統領が指名^(注2)

これら9名のうち、レーンキスト首席判事、スカリア判事、トーマス判事の3名が保守派、オコナー判事とケネディ判事の2名が中道派、そしてスティーブンス判事、ギンズバーグ判事、スーター判事、ブライアー判事の4名がリベラル派であると一般に考えられている。このような構成のために、オコナー、ケネディ両判事は、連邦最高裁の判決を決める上で大きな影響を及ぼしてきたのである。^(注3)

オコナー判事は、保守派と評されるグループと立場を共にするケースが多く、積極的に州権を擁護したことで知られている。しかしその一方で、アメリカの国論を二分する人工妊娠中絶やアフターマティブ・アクション(積極的差別是正措置)などをめぐる訴訟では、保守派と袂を分かち、リベラル的な判決を支持することがしばしばあった。

例えば、人工妊娠中絶を合法化した1973年のロー対ウェード(Roe v. Wade)事件について、それが不十分な根拠に基づいたものであったと指摘しながらも、同判決を覆すことは拒否してきた。またアフターマティブ・アクションについて争った2003年のグルッター対ボリンジャー(Grutter v. Bollinger et al.)事件では、自ら多数意見を執筆し、ミシガン州立大学ロースクールが「人種」を入学選考における一要素として考慮することを支持したのであった。^(注4)

このように、近年の連邦最高裁で大きな存在

感を示してきたオコナー判事が7月1日に引退したことで、その後任にどのような人物が任命されるか、にわかに注目が集まることになった。

II オコナー判事の引退を受けて

合衆国憲法第2条第2節により、連邦判事の任命は、大統領の指名後、連邦上院の承認を得て成立する。従って、まずブッシュ大統領が誰を指名するかに関心が集まるなか、新聞や雑誌上では数名の者がその有力候補として取り上げられていた。そのなかには、ロバーツ判事に加えて、スカリア連邦最高裁判事に考え方が近いとされるJ・マイケル・ルッティング (J. Michael Lutting) 第4巡回区連邦控訴裁判事やゴンザレス (Alberto Gonzales) 現司法長官らが含まれていた。^(注5)

オコナー判事の後任の人選を行う上で、ブッシュ大統領は、次の二つの点を少なからず考慮に入れたと思われる。

その一つは、連邦上院の動向である。今春、上院は連邦判事の承認をめぐり混乱した。前議会において上院民主党が一部の連邦判事の承認をフィリバスター（議事妨害）で拒んだことに対して、上院共和党がフィリバスター阻止に必要とされる要件を緩和する対抗策、いわゆる「核の選択肢 (nuclear option)」を打ち出し、上院は泥沼の様相を呈した。仮に今回、ブッシュ大統領が保守的性格の強い人物を指名した場合、民主党の強い抵抗を引き出し、前回の事態が再び繰り返される可能性があった。^(注6)

もう一つは、ブッシュ大統領の支持勢力であるキリスト教保守派の動向である。キリスト教保守派は、人工妊娠中絶や同性愛者の権利等に反対する人物の指名を強く望み、ホワイトハウスに様々な圧力を掛けていた。例えば、オコナー判事の引退表明後、その指名を拒むため、大統領の側近であるにもかかわらず、有力候補の一人であったゴンザレス司法長官を批判するとい

う異例の活動を展開したが、その理由の一つはキリスト教保守派が人工妊娠中絶に関するゴンザレス長官の立場に懸念を抱いたからであった。^(注7)

要するに、ブッシュ大統領としては民主党による反発を極力抑えつつも、その一方で自らの支持勢力であるキリスト教保守派を満足させる人選を行う必要があったのである。

III ジョン・ロバーツ判事の指名

7月19日の指名発表記者会見で、ロバーツ判事を評して、ブッシュ大統領は「連邦最高裁に威厳をもたらす人物である」と称えている。同判事の経歴と評価は、およそ次のようなものである。

経歴

1979年にハーバード大学ロースクールを卒業したロバーツ判事は、ヘンリー・フレンドリー (Henry J. Friendly) 第2巡回区連邦控訴裁判事やレーンキスト連邦最高裁判事のもとで調査官として勤務した。なかでも「20世紀最高の連邦控訴裁判事」との評価があるフレンドリー判事から強い影響を受けたと言われている。

レーガン政権の発足で1981年からの5年間は、同政権の司法長官特別補佐官や大統領副補佐官の職務についた。政府を離れた1986年からの2年間は、ワシントンD.C.にある大手法律事務所、ホーガン・アンド・ハートソン (Hogan & Hartson) に在籍した。

ブッシュ・シニア政権の発足で、再び政府に戻り、同政権の第一副法務局長となり、1993年以降は先の法律事務所に再び勤務した。そして2003年からは連邦控訴裁判事を務めていた。^(注9)

評価

ロバーツ判事は、保守派の人物であると見られている。しかし同判事がどの程度保守的な傾向を有しているのか、一般に知られている過去

の記録などからは必ずしも定かではない。

例えば、連邦判事の任命をめぐる最大の争点である人工妊娠中絶についても、司法省高官であった1991年に「ロー対ウェード事件判決は誤ったものであり、覆されるべきだ」というレポートを書いたが、2003年の上院司法委員会での公聴会では、このレポートは当時の政府の役割のなかで書かれたものに過ぎないと弁明した上で、「人工妊娠中絶の法的権利は既に認められたものだ」と信じており、私個人の見解では人工妊娠中絶をめぐる過去の判例の適用を妨げるものは何もない」と述べている。

また一部のメディアでは、当初保守系の法曹家を束ねるフェデラリスト協会 (Federalist Society) との関係が取り沙汰されたが、しかしこの団体との繋がりには決して緊密なものではなく、同団体主催の会合に数回出席したのみでメンバーではないというのが実情のようである。^(注10)

ロバーツ判事の「保守的傾向」をめぐる定かでない部分が多いが、その一方で同判事が「非常に優秀な法曹家である」との評価は多くの人々が認めるところであり、そのため、こうしたロバーツ判事の法曹家としての能力に着目する報道も多い。一例を挙げると、*Time* (タイム) 誌は係争中の事件に関してあらゆる角度から議論できる人物が最も優れた法曹家であり、ロバーツ判事は正にそのようなタイプであると評している。^(注11)

IV 指名後の反応

以下では、ブッシュ大統領がオコナー判事の後任候補を決める際に考慮に入れたと思われる、上院民主党及びキリスト教保守派の反応を紹介する。

過去の記録のなかに論争的なものが少なく、また法曹家として高く評価されているということもあり、指名直後、上院民主党議員のほとんどはロバーツ判事を直接批判するようなことは

せず、極めて慎重な姿勢を貫いた。例えば、エドワード・ケネディ (Edward M. Kennedy) 上院民主党議員による次のコメントは、そのような多くの民主党議員の反応を象徴するものであったと思われる。すなわち、同議員は、「十分な審理をせずに、ロバーツ判事に関して評価を下すようなことはしない」と述べるにとどめ、指名反対の道筋をつけるようなことはなかった^(注12)のである。

一方、キリスト教保守派の諸団体は即座にロバーツ判事の指名に対して歓迎する意向を表明した。確かに上記の人工妊娠中絶に関する、一見曖昧に見えるロバーツ判事の態度は、キリスト教保守派にとって受け入れ難いものと思われる。しかしホワイトハウスは、指名直前にキリスト教保守派の指導者らに接触し、次のような保証を与え、これらグループの疑念の解消に努めたと報道されている。すなわち *U.S. News & World Report* (U.S. ニュース・アンド・ワールド・レポート) 誌によると、ホワイトハウスのスタッフがキリスト教保守派の指導者らに、ロバーツ判事がロー判決を合衆国憲法以上に尊重するようなことはないとの確約を与えたのであった。^(注13)

このように、指名後の反応を見ると、ブッシュ大統領は、当初の狙い通りロバーツ判事を指名することで、民主党の反発を極力抑え、かつキリスト教保守派の支持を確保することができたのである。

以上が、2005年7月から2か月間の連邦最高裁判事の人事をめぐる動きである。最初に述べたように、その後、レーンキスト首席判事が突然死去し、この連邦最高裁判事の人事をめぐる動きは急転する。この9月以降の動きについては次号で紹介する。

注

(1) William Branigin, Fred Barbash and Daniela

- Deane, "Supreme Court Justice O' Connor Resigns." *Washington Post*, July 1, 2005.
- (2) "Supreme Court Nominations." U.S. Senate のホームページ
<<http://www.senate.gov/pagelayout/reference/nominations/Nominations.htm>> (last access 2005.8.31)
- (3) Stuart Taylor Jr. "Courting Trouble." *National Journal*, vol.35, June 14, 2003, pp.1832-1841.
- (4) Michael D. Lemonick and Viveca Novak, "The Power Broker." *Time*, vol.166, July 11, 2005, pp.30-33. なお、グルッター対ボリンジャー事件については、次を参照。宮田智之「ミシガン州立大学訴訟への連邦最高裁判所判決」『外国の立法』218号, 2003.11, pp.140-144.
- (5) Howard Fineman and Debra Rosenberg, "The Holly War Begins." *Newsweek*, July 11, 2005, pp.34-35.
- (6) 宮田智之「連邦判事の承認をめぐる上院の対立」『外国の立法』225号, 2005. 8, pp.190-194.
- (7) Richard Lacayo, "The Tipping Point?" *Time*, vol.166, July 11, 2005, pp.22-27.
- (8) White House のホームページ
<<http://www.whitehouse.gov/news/releases/2005/07/20050720.html>> (last access 2005. 8.31)
- (9) 同上
<<http://www.whitehouse.gov/infocus/judicialnominations/roberts.html>> (last access 2005.8.31)
- (10) Liz Halloran et al., "Man of the Hour." *U.S. News & World Report*, vol.139, August 1, 2005, pp.16-23. ; エバン・トーマス、スチュアート・テラー「アメリカの未来を裁く男」『Newsweek (日本版)』20巻30号, 2005. 8.3, pp.26-29.
- (11) Massimo Calabresi and Michael Duffy, "Judging Mr. Roberts." *Time*, vol.166, August 1, 2005, pp.18-21.
- (12) Kirk Victor, "Senate Democrats Stay on Message." *National Journal*, vol.37, July 23, 2005, p.2362. ただし、8月半ばを過ぎて、ケネディ議員らを筆頭に一部の上院民主党議員は、以上の慎重な姿勢を撤回し、ロバーツ判事を強烈に批判するようになるが、そのような態度変更をもたらした大きな背景要因は、リベラル系団体の圧力であった。すなわち、アメリカ的生活を守る会 (People for the American Way) などのリベラル系団体は、民主党議員の姿勢に苛立ちを見せながらも、ロバーツ判事の任命に反対するよう、同党議員へのロビー活動を強めていたのである。こうしたリベラル系団体の圧力の結果、ケネディ上院議員やパトリック・レーヒー (Patrick J. Leahy) 上院議員らは、ロバーツ判事を批判するようになった。しかし、全ての民主党議員がこれらケネディ、レーヒー議員の動きに同調したわけではなく、慎重な姿勢を維持した議員も少なからず存在した。David D. Kirkpatrick, "Senate Democrats Increase Resistance to Roberts." *New York Times*, August 17, 2005.; Charles Babington and Dan Balz, "Democrats Feel Heat From Left On Roberts." *Washington Post*, August 17, 2005.
- (13) Halloran, et al., *op.cit.*
- (みやた ともゆき・海外立法情報課非常勤調査員)